

J R 信濃川発電所に係る河川環境検討会 (第1回)

議事概要

東日本旅客鉄道株式会社

議事概要

1. 設立趣旨及び規約、委員長選出への委員からのご意見

- ・ 様々な利害関係者が参画している場なので、設立趣旨の「交流」は変更した方が適切
⇒ 変更案について、全委員の了承のもと、確定済
- ・ 信濃川本川及び支川の魚類相が失われてきている現状を踏まえて、委員の方々から様々な意見を出して頂きながら、生物多様性の保全について議論していきたい
- ・ 浅枝委員を委員長として推薦

2. 浅枝委員長就任あいさつ

- ・ 民間主導によるあまり例のない組織体、新しい提案を世界に向けて実施して欲しい
- ・ 結果を踏まえて計画を順応的に変えながら調査している手法は、いろいろ調べなければならぬ仮説が立てづらい時には特に有効、こういった取り組みを続けてほしい

3. 委員からのご意見

1. 2024年度調査と取組み

2. 調査結果報告(魚類遡上状況調査、サケ遡上状況調査)

- ・ この検討会は、平成9年河川法改正による河川環境の整備と保全に向けて、河川環境改善の前進の第一歩、飛渡川の河口の形状の問題、田畑の農薬は稚魚への問題あり、100万尾のウグイを放流していきたい、多くの調査データは課題の解決に有効で今後も期待
- ・ サケの産卵場ができている箇所物理環境や濁りのデータがあるとよい、産卵場の分布モデルにより、それに近いものを皆さんと協力して作る考えもある
- ・ サケの遡上数減は高い海水温の問題、サケの産卵場は信濃川の支流が多い、信濃川本川でも産卵は確認されているが、出水によって流されてしまい、その後の状況も不明

議事概要

3. 委員からのご意見

1. 2024年度調査と取組み

2. 調査結果報告(魚類遡上状況調査、サケ遡上状況調査)

- ・ 取水口への魚の迷入の課題があり、環境DNAで分かることもあるなと思う
⇒取水口における、気泡による迷入防止対策やオイルフェンスの設置等によるサケ稚魚の迷入防止対策を実施しているが、今後は、魚の降下にも焦点を当てて様々な調査方法を検討していきたい。
- ・ 環境DNA調査のパッシブサンプリング法は新しい技術で、夜間の状況も分かる

3. 河川環境と水利使用との調和、地元との取組み

- ・ ある程度の規模の放流については、流量の変化率により掃流力の影響も変わるので、ピークの到達時間、放流頻度、継続時間を検討して整理すると良い
- ・ 人工的な流れである増放流は、1日中同じ量を維持するのではなく人工的な波形で掃流力を期待したり、水温を考えるなら昼間と夜間で変えたりするなど、目標を立てて検討することで効率的に運用できる
- ・ 藻類は光に弱いので良い時期に藻類の更新が実施されている、日中に一旦水位を下げることで藻類が乾いて流れやすくなる等いろいろな方法はあるが、社会貢献として非常に重要
- ・ サケ稚魚に触れるのも良い体験ではないか
- ・ 稚魚放流はもともと市の取組みとして実施してきたものにJRは協力してきた、水辺の活用への思いはある、今はラフティングの利用が多い

議事概要

3. 委員からのご意見

3. 河川環境と水利使用との調和、地元との取組み

- ・ 地域おこしとして良い宣伝となるはずの信濃川の河川環境への取組みの首都圏での広報が皆無、河川環境と地域活性化の結びつき、インバウンド向けの宣伝も重要
- ・ 河川の上下流の交流という取組みを、民間の電力会社がやっている例がある。こうした仕組みや取組みを、この地域でも作れないか検討していくことが必要ではないか
- ・ TNFDなど現在の流れに沿ってシナリオを作ったうえで、カーボンニュートラルやネイチャーポジティブ等の施策とのバランスを取りながらそうした活動を継続することが、地域活性化につながるのではないか
 - ⇒ J R 東日本では、昨年度から株主を対象に発電所等の見学会を実施している、今後、対象を一般利用者にも拡大したり、情報発信の方法を工夫したりしたいと考えている
- ・ 魚道観察室は知らなかったが、行ってみてよい施設なので広報をしっかりとの方が良い
- ・ 水質、魚の餌となる藻類、昆虫の情報も重要、鳥がいることで魚がいることも分かる

4. 2025年度調査計画案

- ・ 魚野川と妙見堰付近でも魚類相を把握した方が良い
- ・ 調査にあたっては、川で何が起きているかという観点から、現状把握が重要であり、これらの調査は研究的ではあるが、試しに調査をしてみて、分かったことがあったら、さらに規模を拡大して調査を実施するという手法も考えられる

5. 生物多様性の保全に関する東日本旅客鉄道株式会社による海外論文

- ・ 特になし